津軽のねぷた祭

青森県教育センター第一研修課
太田　耕正

●弘前の扇ねぷた

一、はじめに

四季の変化に伴ってめぐりもたらされる自然の制約からの解放と、自然の恵みに対する地域住民の喜びの結集したものとして、ここみちのくにおいても、伝統的行事・祭が継承されてきている。その中で最も躍動的で地域住民が一体となって参加し、エネルギーをまさしく爆発させるのが、津軽一円を中心に催されるねぷた祭である。

当地域の住民は一年のうち、およそ五ヵ月間、冬ごもりの生活を強いられる。この期間は雪に閉ざされた生活、厳しい自然との戦いの生活が続く。雪の世界は一面平和の世界にもたとえられることがあるが、他の一面は依然として変わらない荒れ狂う厳しい世界である。その中でじっと耐え忍ぶ生活が続くのである。

このことが当地域の風土を形成する重要な要素であることは否定できない。口数が少ない、引っ込み思案、動作が重い、粘り強い、黙々として働く、と言われる特徴も自然への対し方を通して形成されたものと考えられる。

こうした風土・気風の中にあって、ねぷた祭はまったく異質の如くエネルギッシュであり、陽気であり、積極的な祭である。あの南国的なリオのカーニバルにも匹敵するような側面をもった祭である。

あの長い長い冬ごもりでじっと我慢し、押えられた気持ちを、あの束の間の真夏にねぷた祭でもって一遍にはき出してしまうことにも受けとられる。

二、ねぷたの由来

ねぷたの由来についてはいろいろな説があり、　はっきりしない点もあるが、一般的に言われているのは、眠り流しの燈籠が変化したものであるということである。

その燈籠がお祭りとしてかつぎこまれるきっかけとなったのは、津軽藩祖為信が京都に滞在中の文禄二（一五九三）年七月のウラ盆に、お国自慢のため重臣服部長門守に大燈籠をつくらせたのが、その始まりだと言われている。

ねぷたが記録に出てくるのは弘前藩第五代藩主、津軽信寿の享保年間（一七一六～一七三五年）であり、藩主が物見台を造らせて見物したと記録されている。

天明年間頃までのねぷたは、さして人目を驚かすような大物はなかったと思われるが、文政年間（一八一八～一八二九年）から弘化年間（一八四四～一八四七年）にかけて大型化したことが、内藤官八郎という人の記録からわかる。弘化の頃には各町内ごとに大物作りを競い、豊年には一町内から大小二つずつも出したという。大物になると道路いっぱいの幅で、高さ五間余もあったという。弘化の頃のねぷたの大型化に伴い、ねぷたの形態は、天明の頃には飾りであった扇や三日月の部分が逆に大きく表され、反対に本体であった四角な燈籠が小さく表されるようになって、現在の扇ねぷたと組ねぷたの原型がほぼできあがることになったと見ることができる。

三、青森ねぷたと弘前ねぷた

イ、青森ねぷた

現在は青森ねぷたとあえてねぷたと区別して表現しているが、青森でも本来は

●青森ねぶたのハネト（跳人）

ねぶたと呼んでいた。青森市出身の故棟方志功画伯がねぶたと話されていたのが、まだ記憶に新しいが、そのことを裏づけることとしてあげられる。〝ねぶた〟という呼び方は標準語化された言い表し方といってよいと思う。

青森ねぶたは明治初期の記録にも残されているように、津軽一円で伝統的に催されてきているねぶた祭の中にあって独特なやり方で実施されてきている。青森ねぶたには組ねぶただけしかない。青森市では組ねぶたしか作らないのである。

組ねぶたは竹、針金、そして木材などで主として戦国時代の武者の形を組んで、その表面に和紙をはり合わせてつくった人形燈籠のことである。人形の中にはたくさんの豆電球（かつてはローソク）が取り付けられる。この製作には本来は町内のねぶた愛好者の有志が中心になってあたった。町内の商家の土蔵などを借用しおよそ二ヵ月ないし三ヵ月の期間、余暇を利用して作った。現在の青森ねぶたにおいては、町内というよりは、市内にある企業の職場が中心になってねぶたを出し、その製作は専門家に依頼する場合が多いようである。ねぶたが製作される期間は、夜ともなれば、笛や太鼓の囃子のけいこの音がそちこちから流れ、その頃から地域住民の気持ちは躍動し、血が騒ぎ出すことになるのである。

●注

藩政時代のねぶたを図で表した資料として最も古いものは天明八年（一七八八）、比良野貞彦が藩主に従って下国したとき、津軽の風俗をまとめた「奥民図彙」に出ている「子ムタ祭之図」である。

それによると、現在の組（人形）ねぶたや扇ねぶたのような大規模なものではなく、明らかに四角な燈籠が主体でその上に小さな扇燈籠や三日月形の飾りや柳の枝などを飾りつけている。四角や長方形の燈籠には、絵は描かれておらず、表面には「七夕祭」「二星祭」「石投無用」などの文字が書かれ、旧暦七月七日に合わせて行われたことを物語っている。

●参考文献
『わがふるさと』第五編　陸奥新報社
『青森県百科事典』東奥日報社

青森ねぶたにはハネトがつきものである。ハネトは男女とも花笠をかぶり、ゆかたにたすきがけ、白足袋をはいて、腰にはガンガンシコと呼ぶブリキ製の器を下げる。そして〝ドンコ、ドンコ、ドンコドン〟という太鼓の音に〝ラッセ、ラッセ、ラッセラー〟という掛け声を合わせ、各自持参の割ばしでガンガンシコを〝ガン、ガン、ガン〟とたたき、跳ね踊りながらねぶたを運行するのである。運行の途中では酒の差し入れがある。ハネトは腰のガンガンシコに酒をついでもらい、それを一気に飲み干しながら気勢をあげ、踊りも一層エキサイトしたものとなって、ねぶたは最高潮に達する。青森ねぶたは凱旋の喜びを表したねぶたであると言われている。

このように青森ねぶたは時代の進歩に合わせて祭の様式を積極的に変化させ、ショーとしての華やかな傾向を強めていった点に特色がある。

ロ、弘前ねぷた

弘前ねぷたは藩政時代からの伝統を受けつぐものであるが、ねぷたの照明、製作方法などには時代の進展に相応した近代化や新しい工夫のあとが認められる。しかしその中にあっても扇形という基本型および祭を支える慣行は、基本的には伝統的様式を重んじ、継承してきたものである。

弘前のねぷた祭は、本来は旧暦の七月一日から七日まで催されたが、現在は児童・生徒の夏期休暇期間に合わせて八月一日から七日まで行われる。弘前ねぷたには人形ねぷたも出されるが、扇ねぷたが圧倒的に多い。ねぷたは各町内単位で製作し、出すのが一般的であり、そのための役割分担などについても町会組織と関連させながらできている。現在はねぷたを出す場合のねぷた運行責任者は、大体、町会長があたることになっている。

ねぷたは午後六時三十分頃までに弘前城追手門前の外堀付近に一斉に並び、ねぷたの武者絵がねぷたの中からともされるあかりに映えてくる午後七時頃から運行開始される。ねぷたには、車がつけられており、それを二本の綱で引きながら運行する。それには町内の長老、若者、児童・生徒、幼稚園児というふうにまさしく老若男女、町内総出で参加する。

弘前では笛や太鼓、ほら貝の囃子にあわせて〝ヤーヤードウー〟という掛け声をかけながらねぷたを引くのである。その掛け声はねぷたの武者絵から飛び出してくるかのように勇壮で躍動的な感じで真夏の夜空に響きわたるのである。

弘前ねぷたは出陣のけたたましさと同時に郷愁を誘うような雰囲気を併せ持っている。